

「検証・改善・徹底」を目指した学校力向上の取組 ～学校マネジメント、人材育成を中心に～

釧路町立富原中学校
学級数 13
(校長 武山 昇)

I はじめに

急激に変化する社会に主体的に対応し、生涯にわたって生き抜く力や、ふるさとへの愛着をもってよりよい社会の実現に向けて貢献できる生徒の育成が求められている。

こうした中、本校では、家庭や地域からのニーズに応えるため、「検証・改善・徹底」のサイクルを確立した学校力の向上を目指し、平成31年度（令和元年度）から、「学校力向上に関する総合実践事業」の実践指定を受け、取組を進めている。

II 実践について

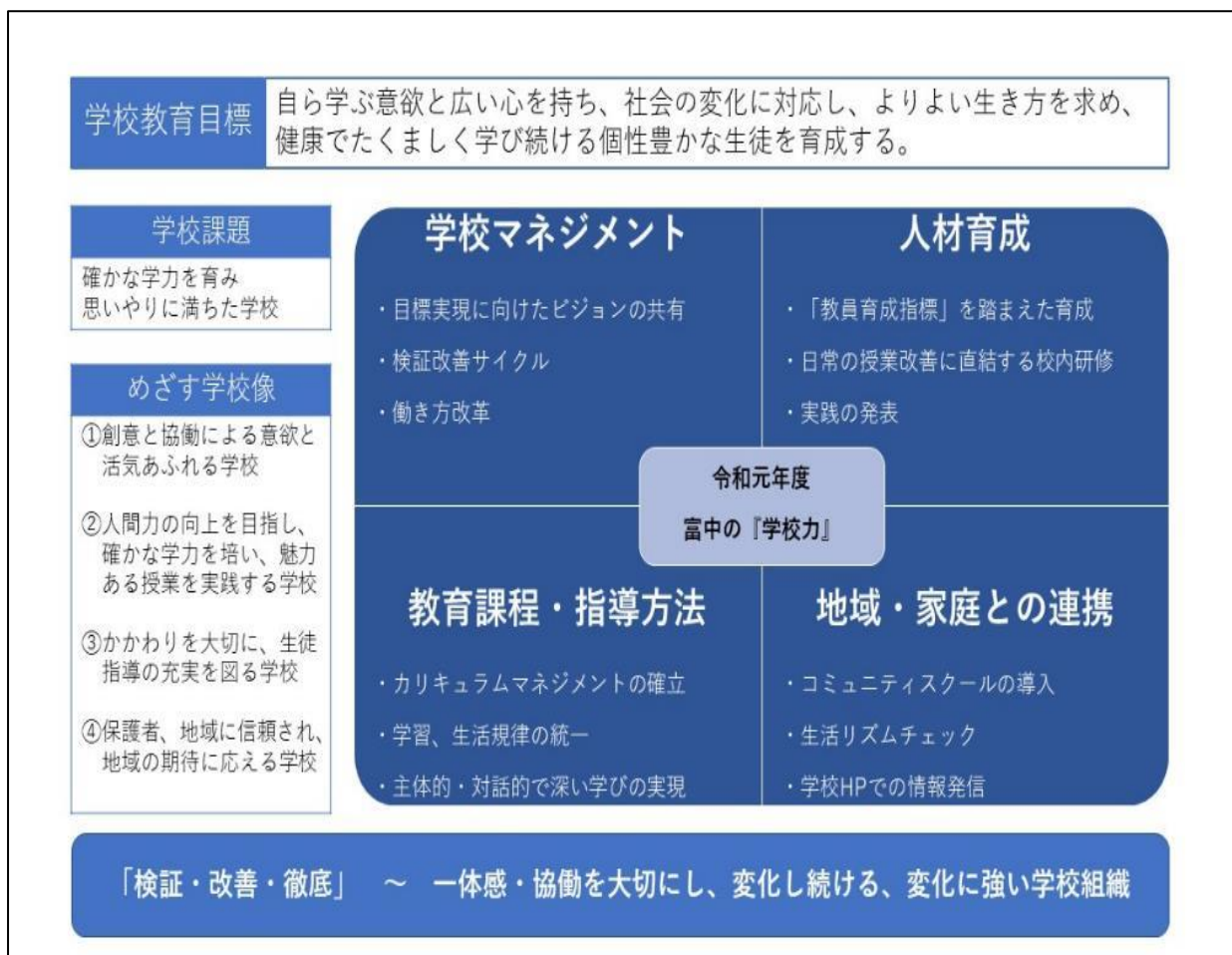
1 全体構想

本校では、目指す学校像にせまるため、実践指定をきっかけに学校改善を進め、これまで検証が十分とはいえない教育活動を見直すこととした。

具体的な内容は、道内の先行実践や平成28年度から実践指定を受けている校区の富原小学校の先進的な取組を参考にした。

以下は、今年度重点的に取り組んでいる内容（資料1）であり、「学校マネジメント」と「人材育成」を中心に取り上げている。

〈資料1 令和元年度富原中学校学校力向上事業構造図〉



2 学校マネジメントの充実

(1) 検証改善サイクルの実質化・迅速化

生徒・保護者・教職員が同じ内容について評価できるよう、今年度の学校経営の重点の項目を中心に学校評価の文言等を改善し（資料2）、生徒対象を18項目、保護者・教職員対象を22項目に整理した。

また、否定的な回答が重みを増し、改善が必要な部分が明確になるよう、評価のスケールを昨年度までの「4、3、2、1」から、「+2、+1、-1、-2」と改めた。このことにより、生徒・保護者・教職員の評価が比較しやすくなるとともに、認識のずれを迅速に分析し、改善策を講じることができた。

〈資料2 同じ項目で評価できるようにした評価項目の改善例（一部抜粋）〉

対象	昨年度	今年度
生徒	家庭学習を計画的に取り組んでいる。	家庭学習は <u>計画を立てて</u> 取り組んでいる。
保護者	お子様は、家庭学習を自発的に取り組んでいる。	お子様は、 <u>計画的に</u> 家庭学習に取り組んでいる。
教職員	家庭学習の定着を図るための具体的な取組を行っている。	<u>計画を立てるよう促し、家庭学習の習慣化を図るための</u> 具体的な取組を行っている。

学力調査の生徒質問紙等から「放課後の過ごし方」「学習習慣の形成」に課題が見られたため、一層「家庭学習習慣の形成」を意識できるよう文言を整理した。

◎生徒・保護者・教職員ともに高い

(1) 行事が楽しい (2) 生徒会や学級の仲間意識

《今後に向けて》

- ・学校経営の重点である学級の連帯感を高める取組を学校全体で共有し、さらなる充実を図る。

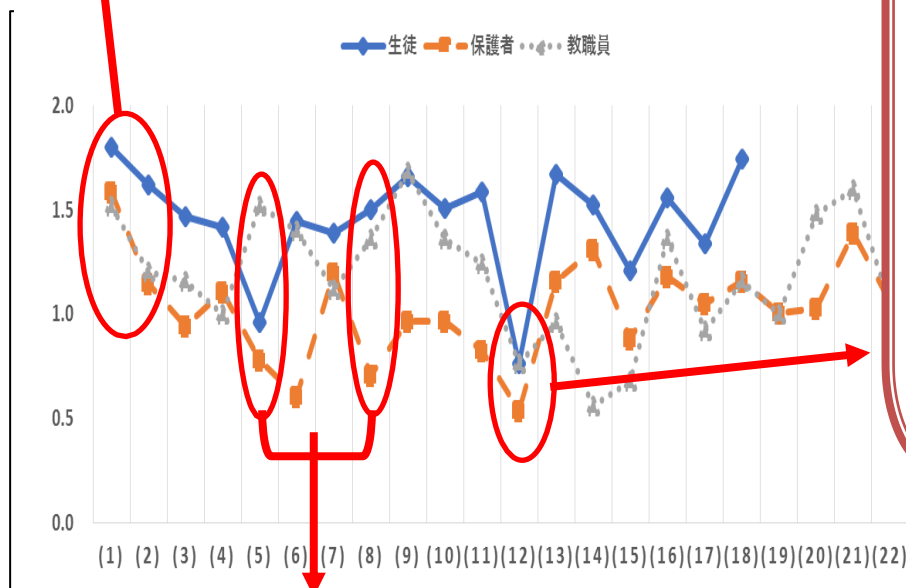
▲生徒・保護者・教職員ともに低い

(12) 家庭学習の習慣化

《今後に向けて》

- ・生活リズムチェックシートの集計結果と共に詳細に分析し、個に応じた具体的な取組を助言する。
- ・保護者と連携を図り、生徒に将来を見据えて今できることを実践することの大切さについて粘り強く指導する。

〈資料3 生徒・保護者・教職員の学校評価の平均値のグラフ〉



△生徒・保護者・教職員の評価にずれが見られる

(5) 先生に相談しやすい (8) 分かるまで教える授業

《今後に向けて》

- ・生徒への共感的理解と愛情をもち、生徒との信頼関係の一層の構築に努める。
- ・単元や1単位時間の課題の提示や振り返りを位置付けることにより、生徒が何を学んだかが分かる授業改善を実施する。

(2) 学校における働き方改革の推進

① 学校マネジメントへの参画意識の向上と業務の効率化

教育活動の改善を図り、教職員の学校マネジメントへの参画意識を高めるため、職員会議で「KPTA」シート（資料4）を配付している。「KPTA」とは、「Keep・Problem・Try・Action」の頭文字から「KPTA」シートと名付け、具体的な行動プランやアイデアを充実させることをねらいとしている。本シートを活用し、職員会議では発言できなかったことや、職員会議の議題には上っていないが日常の教育活動を推進する際に課題と感じていること、教職員の学校運営への参画意識を高めるアイデアなどを学校改善に取り入れることにしている。

今後は、教職員の学校運営への参画意識を高めるため、分掌や学年の枠を取り払い、年齢層のバランスに配慮した小グループに基づくワールドカフェ形式（資料4）を取り入れる予定である。テーマは学校評価において課題として見られた「家庭学習を活性化させるための方策」など、学校課題について多面的に議論する予定である。

また、今年度から、職員会議の前段の分掌部会や運営委員会、職員会議の配付資料についてはペーパーレス化を図り、紙資源の節約や業務の効率化を図ることができた。

〈資料4 KPTAシート（上）とワールドカフェテーブル表（下）〉

氏名() 月日

富原中学校 学校改善シート KPTA

Keep (良かった、続けた)	Try (試す、挑戦する)	Action (具体的な行動プラン、SWH)
<p>今年度の実践例</p> <p>《Problem》 長期休業中の課題が各教科で配付されていて、学級担任が把握できていない。</p> <p>《Action》 課題一覧を作成し、生徒、学級担任とともに課題を把握しやすくなった。</p>		
Problem (問題点、改善点)		

・ワールドカフェテーブル案

管理部	西山	武山校長	河原教頭	伊藤
教務部	町田 (1)	濱崎 (1)	高橋 (3)	和田 (2) TL
	太田 (3) TL	立石 (1)	眞野 (2) TL	新川 (特)
指導部	小林 (2)	八城 (2)	児島 (3)	飛島 (1)
	菅原 (1)	泉 (特)	西村 (特)	叶内 (特)
研修部	山神 (特)	阿部 (1)	堀田 (2)	尾崎 (3)
	A	B	C	D

敬称略
TL: Table Leader

② タイムマネジメントの実際

本校では、先行実践を参考とし、タブレットとICカード、フリーソフト「Punch_Out」による勤務時間の管理を行っている。「Punch_Out」は簡単な操作で月報をアウトプットすることができ、教職員一人一人の勤務時間や残業時間が可視化されるソフトである。

教職員は月末に当月分の出勤や退勤の時刻の記録から、自身の働き方を見直し、会議や打合せを精選することや退勤時刻を決めて業務に取り組む姿が見られるなど、業務改善の意識を高めている。

また、中学校における残業時間が長くなる要因の一つである部活動については、昨年度から全部活動の保護者会を同日開催で行ってきた。

今年度は、校長が保護者に対して「富原中学校の部活動に係る活動方針」（資料5）をもとに、活動の基本方針や活動時間と休養日、家庭・地域・学校の関わりなどについての説明し、生徒のバランスのとれた心身の成長を目指した部活動の実施について理解を求めている。

〈資料5 部活動に係る活動方針〉

富原中学校の部活動に係る活動方針
2019年制定 校長 武山 昇

富原中学校では部活動の教育的意義をふまえて、スポーツ・文化が果たした「部活動の在り方」に関する総合的なガイドライン、北海道が策定した「北海道の部活動の在り方に関する方針」のもと、生徒・教職員が一体となって充実した部活動が行われるよう、次のように活動方針を定めます。

■ 活動の基本方針

- 学校教育目標に基づく教育活動の一環であることを踏まえ、適切な運営を行うための体制を整備する。また、計画的な活動を行うために富原中学校部活動実施規定を定め、全部活動がその規定に従う。
- 生徒の心身の健康管理、事故防止、体罰等の根絶を徹底し、合理的・効率的・効果的な活動となるように適切な指導が行われているか確認を行う。
- ガイドライン等をふまえた適切な休養日を設定し、学習、家庭生活、様々な体験活動等のバランスのとれた生活を送ることにより、偏りのない心身の成長につながるよう配慮する。

■ 活動時間と休養日

学年/科目	学年/科目 (大会・コンクール等1ヵ月以内)
(1) 活動時間 平日 2時間程度 休日 3時間程度	(1) 活動時間 平日 3時間程度 休日 4時間程度
(2) 休養日 平日1日以上、週末1日以上を含む 週2日以上 年間10日以上 学校開庁日は原則休止とする	(2) 休養日 週1日以上 週の上限16時間を越えないこと 年間10日以上となるよう調整すること

■ 家庭・地域・学校のかかわり

地域

様々な体験活動、地域の教育力

家庭

家族の関らん、家庭での役割分担

バランスの取れた心身の成長

学校

学校課題解決の時間確保
教師自身の社会的な生活

北海道教育委員会の
説明はこちらを
ご覧ください

新しい部活動の在り方についてご理解・ご協力をお願いします。

3 中学校におけるメンターチーム方式による人材育成

令和元年度の初任段階教員は4名、教員経験が5年未満の期限付の教員も含めると一般教職員の23.8%が若手教員に当たる。メンター研修を始めるに当たっては、全教職員の協力を得るため、用語の定義や富原中学校におけるメンターチームの組み方についてガイダンスを行った。本取組の重点は若手教員に対する授業力向上であるが、中堅教員の中にも自身の実践を見直し、研鑽を積み重ねたい教員や特定の分野に秀でている教員もいることから、若手教員、中堅教員相互の学びの場として、次に示す(1)～(3)の3種類のチームによるメンター研修を実施することとした。

(1) 個別メンタリング

主に初任段階1年次教員の日常の授業におけるティーム・ティーチングを通じたチーム体制である。同教科のメンターがT2として生徒の支援に関わりながら、T1の授業観察を行い、発問や板書等の授業づくりの基本的な内容を中心に気付いたことを授業後にフィードバックする形を取っている。

(2) 課題別メンタリング

課題別メンタリングの第1回は7月末に「ICT機器の活用」のメンター研修を行った。2名の教員が講師役として、授業で使用している機器や便利なアプリを紹介した。実施に当たっては事前にメンティの疑問等を集約し、ニーズにあった研修を行うことができた。

第2回は冬期休業中に「進路指導」や「部活動指導の在り方」をテーマに実施するなど休業中における研修の充実を図っている。

〈資料6 課題別メンタリングによる研修の様子〉



(3) 若手メンタリング

初任段階教員だけで構成される研修である。日常の教育実践の悩みや課題などを、若手教員同士で相談し合う場とする。いつもは指導を受けることが多い初任段階教員がメンターとなり教え合うことにより、これまでの実践を振り返る機会となっている。

《メンター研修振り返り》

〔メンティ〕

- ・教科の先輩教員の専門的な視点のアドバイスは、授業づくりの参考になった。
- ・実際に授業観察をしていただき、実践的に研修することができた。

〔メンター〕

- ・若手教員に教えるため、自分の授業実践を見直す機会となった。
- ・日常の授業で活用しているものをそのまま活用するなど、大きな負担はなかった。

III 成果 (○) と課題 (●)

○ 学校における働き方改革として業務改善の取組を推進することを通して、若手教員も含め教職員の参画意識が高まってきた。

○ 学校評価アンケートの学力の向上に関する項目を前回の結果と比較すると、生徒、保護者ともに肯定的な回答が上昇するとともに、保護者・教職員間の意識の差が縮まった。

○ 初任段階教員へのメンター研修の取組を通して、初任段階教員の教員としての資質・能力を高めるとともに、中堅・ベテラン層の教員に若手教員の手本となる授業実践への意識を高めることができた。

● 令和2年度からの富原地区コミュニティ・スクールの開始を見据え、家庭・地域へ積極的に学校や生徒の情報を提供し、家庭・地域との連携を一層推進する必要がある。

● 今後も教育活動を真摯に検証し、改善を図り、全教職員で徹底した実践を推進する必要がある。

質問8		H30.12	R1.7
先生方は授業で、分かりやすく、分かるまで教えてくれる(教えている)。	生徒	1.3	1.4
	保護者	0.7	1.0
	教職員	1.6	1.4

+2 ← 肯定・否定 → -2